

2023.2.19 相模原市立博物館

令和4年度かながわの遺跡展「縄文人の環境適応」第3回 特別講演

縄文時代の身体象徴と環境変化

中村耕作

(国立歴史民俗博物館准教授)

1. この講演について

狩猟・漁撈・採集・栽培を基本とする縄文時代の生活は、大局的には変化は少ないが、集落の消長増減・土器様式・儀礼具などには様々な変化が知られている。

今回の遺跡展のタイトルにもある「環境」は、「自然環境」の変動を意識したものであるが、この講座では「社会環境」も考慮に入れる。展示図録冒頭にも示された勅使河原彰氏による時期・地域ごとの遺跡数の推移のグラフによれば、日本列島各地で遺跡数の増減は異なっており、勅使河原氏自身は獲得経済の限界性と地域ごとの生業差で説明しており、一律の自然環境の影響だけでは説明できない。

そこで、この講演では、縄文時代の大きな特徴である「身体象徴」を中心に文化面の変化と、そこにみられるコミュニケーションの特徴を確認した上で、「社会環境」、さらに「自然環境」との関係を検討したい。

2. 環境変化研究の現在

(1) 自然環境変化研究の動向

鈴木保彦氏による第1回講座で、各種の自然環境の変動研究が紹介されている。一口に自然環境といっても様々な指標がある。古くは東京湾岸の貝塚分布から海岸線の変化を推定する方法があり現在では各地のボーリングから海水準の変動が検討されている。また、尾瀬をはじめとする花粉分析をもとに植生を復元し、そこから気候を復元するものもあり、各地で結果が蓄積されている。グリーンランドなどの氷床コアの酸素同位体から世界規模の乾湿・気温変動を推定する研究があり、各種の「イベント」が提起されている。放射性炭素年代測定法の研究は太陽活動の変化との関わりも議論されている。

こうした世界規模の気温の変化とそれに伴う動植物相の変化は、例えば、東西アジア地域での定住化・農耕化の動きと重なっており、日本列島における旧石器時代から土器出現期への変化とも重なっている。

しかし、自然環境変化の研究は、さらに進展しており、より細かい時間幅・細かい地域単位での研究が志向されている。中でも最も注目されるのは、年輪に含まれる酸素同位体を分

析した降水量の復元であり、年輪が存在する時間幅であれば、年単位（年輪幅が大きい場合にはさらに細分も可能という）で復元することが可能である。しかし、歴史時代はともかく先史時代の研究はこうした超高精度の気候変動研究では目盛りが細かすぎる。そこで、考案されたのが、大規模な降水の「頻度」であり、日本史の時代区分と降水量の不安定期（中期変動＝数十年周期変動期）が一致する時期のあることを示した（中塚 2022 など）。残念ながら、このデータは現状紀元前 600 年までしか利用できないが、年輪さえ発見されればより詳細な変動を知ることができる。この点、伊勢原市西富岡向畑遺跡の埋没樹木への期待は高い。さらに、年代測定技術や、動物考古学・植物考古学の進展は、よりローカルな時間的変化・空間的な変異のデータを蓄積している。

（２）社会環境変化研究の動向

動物・植物考古学の進展

こうした研究動向の成果と課題の一例として、縄文時代終末から弥生時代開始期の理解を挙げよう。冒頭の遺跡数データからも、中期のピークをへて、後・晩期は「衰退」に向かい、稲作という新しい生業をもった文化が導入されたという理解が一般的なものであった。かつては、狩猟採集という獲得経済の限界と稲作という生産経済への移行という説明が行われたが、その後、その背景として後期や晩期の「冷涼化」が想定された。冷涼化の根拠は尾瀬の花粉分析、東郷池の淡水化・北大西洋深海底コアの融氷イベント（ボンダイイベント）、などである（工藤 2012）。その後、動物考古学・植物考古学からこの点に関する検討が続けられ、関連するかもしれない植生の変化や貝類・獣骨などのサイズの変化が論じられた。こうした中、阿部芳郎を中心とする研究グループはこれらが文化の「衰退」を表しているかの共同研究を行い、自然環境の変化と人為的な生業・社会活動によって複雑な状況を示していたことが論じられている（阿部編 2019）。そこでは、生業活動に関して、遺跡間分業や労働組織、貝塚での貝類・動物の種や大きさの組成変化（第 2 回での樋泉岳二氏講演参照）、水辺への活動域の変化やその場の植生の復元、人骨に残る炭素・窒素安定同位体による食性復元などが論じられている。さらに、こうした後・晩期研究のほか、他の時期においても花粉・種子・圧痕の分析から栽培、生業域など多角的な検討が行われている。いずれも自然環境だけでなく、人間の文化的・社会的選択に拠るところが大きい。

住居址数の増減＝文化の繁栄・衰退か？

前掲書の中で、樋泉氏は「人口の減少は文化・社会の「衰退」か」と問題提起をしている。樋泉氏の分析によれば陸獣を主要食料に切り替えた（適応）によって人口が減少したとして、何をもって「衰退」と評価できるのか？という歴史認識に関わる問いである。

しかし、ここではそれ以前の問題である、遺跡数・住居址数増減＝人口増減なのかという点に触れざるを得ない。例えば、中期の「繁栄」の指標となる、加曽利 E2 式期の住居址のピークについて、高橋龍三郎氏は東京湾岸における廃屋墓の盛行と合わせて、住居廃絶に至る期間が短くなった（死者が出るごとに住居を廃した）ことが、住居址増加の原因ではない

かとの仮説を提示している。この場合、住居址の増減は、1つの竪穴・柱穴・炉・埋甕をどの程度の期間継続利用するかという習俗次第ということになる。また、この問題は定住度ともかかわりを持つ。西日本をフィールドとする縄文研究者の多くは定住性を高く評価していない。矢野健一氏(2016)は、定住性が低い=1つの住居に留まる期間が短い場合、各地を転々とした結果として住居紙数は増えるとの見方である。住居址数の増加が安定性の指標にはならない可能性を示している。

後述のように、中期末/後期初頭は縄文時代における最大の画期の1つである。これまで一般的に、東京・神奈川での住居址数の減少と大規模拠点環状集落の終焉から、中期社会の「崩壊」という評価が与えられてきた(山本 2002 など)。新たに西から伝わった中津式系の称名寺式という新たな土器様式が出現したこと、新たな紐帯の再編を目的としたと解釈された再葬習俗の出現なども、在地文化の衰退というイメージに寄与したかもしれない。しかし、この時期には、環状列石や敷石住居など新たな文化要素も目立っており、この部分をポジティブに評価する阿部昭典氏(2008)は、衰退という見方に疑問を投げ掛けている。さらに、東北地方はもちろん、同じ関東でも、大規模集落遺跡が継続する栃木県の事例や、中期末に住居址が増加する山梨県北杜市域など、南西関東だけの事情で全体を語れないことにも目が向けられるようになってきている。

2. 社会変化への対応としての身体象徴コミュニケーション

社会変化における儀礼・象徴の重要性

冒頭に述べたように、縄文時代早期以来、生業技術には大きな変化は認められていない。これに対し、小林達雄氏(1977・1997)は、これを補う「第二の道具・技術」=「観念技術」の充実が縄文文化の特徴とした。小林氏のように、これをポジティブに評価する観点のほか、獲得経済の限界に対する停滞性を表すものという評価(岡本 1975)もあるが、いずれにしる同じことを違う立場から評価したものである。近年では、谷口康浩氏(2021)が、縄文の社会進化の過程における儀礼・祭祀の存在を重視し、「社会ドメスティケーション」として儀礼を位置付ける視点を示している。谷口氏の議論は、もともと環状集落やそこでの墓域の存在意義の検討からスタートしており、環状集落は人口密集期に社会的調整機能を担い、墓域はその存在根拠としての祖先の重要性を示すと論じている(谷口 2005)。

儀礼がコミュニケーションで果たす役割を理論的に論じたのが溝口孝司氏(2022)である。考古学的要素AとBの違いを、その背景となる事象A'・B'におけるコミュニケーションの特徴と関連付けて、A・Bがコミュニケーションに果たした意味を説明するのが基本的な議論の枠組みである。溝口氏の主要なフィールドは弥生中期以降の西日本であるが、その考え方は他でも適用可能である。

コミュニケーションの媒体としての身体象徴

今回は、儀礼やそこで用いられる象徴のうち、身体に関わるものを重点的に取り上げる。縄文時代における土偶や石棒などの身体造形や、玉・耳飾などの身体装飾、葬送などの死者

の身体などである。石鏃や石皿、石斧などの石器やその石材、おそらく網籠なども儀礼における象徴的意味を担った可能性が高いが、儀礼的なシチュエーションでの出土状況に限って取り上げたい。

さて、身体象徴は、大きく2種類に分けることができる。

①身体の外延：衣装・入墨・装身具・儀仗（小形石棒類）など身体を飾るものであり、身体そのものが持つ象徴的意味を増幅するものである。家屋の装飾などもここに含まれよう。

②身体への作用：飲食（鍋・浅鉢・注口土器）・灯（釣手土器）・燻煙（異形台付土器・香炉形土器？）など臨席者の五感に訴える象徴物である。それを持った感覚や注ぐ・注がれるなどの所作なども含まれよう。なお、②の象徴物は日常的器物が用いられる場合もあるが、特別な素材・装飾・形態などの専用品が造作される場合もあり、その1つとして土偶・顔面把手などの顔身体造形がある。葬送における遺体・遺骨も操作対象であるので、②に含めておく。

3. 前期の副葬・着装品

①の装身具は旧石器時代から知られているが、神奈川県においては前期の海老名市上浜田遺跡などの玦飾（玦状耳飾）が初限となる。その後、集団墓地が集落内に設けられるようになるが、当初は深鉢と玉類、その後は、浅鉢が副葬されるようになる。深鉢は横浜市北川貝塚、浅鉢は千葉県・東京都に多いが県内では藤沢市北窪遺跡に例がある。

この浅鉢は②の飲食に関わる道具である。それまでほとんど鍋1種類しか作られなかった土器に盛付具という新しい器種が加わったもので、それまで鍋（深鉢）の形や文様にバリエーションがあったものが、浅鉢のバリエーションへと変化する。形や文様のバリエーションは、使い勝手とは無関係な、メッセージ性を重視するものである。鍋の主要機能は調理であり、食の分配も兼ねていたが、この時期の浅鉢はおそらく分配機能に特化しており（中期後半～後期前半の浅鉢は浅鍋でもあった）、副葬品には小形のものが多い。従来多くの人が関係した限られた人物ではなく、関係人数は少なくとも多くの人物が葬送されたことを示唆している。

なお、大形の浅鉢は住居床面から2つセットで出土する事例が岐阜県や群馬県などで発見されており、赤／黒、大／小、正／逆などの抽象的な対置要素（後述）が認められる。こうした状況下における大人数と関係する者の儀礼行為と推定される（中村 2013）。

4. 中期の顔身体鍋・神の灯

墓地への埋葬や限られた者への玉類（ヒスイ・コハクなど）、耳飾の副葬・着装（①）は中期にも継続するが、これとは別に、中期初頭には土偶に顔が付き、大形石棒や顔面付土器が出現するなど②の特化型が出現する。その背景は不明な点が多いが、ここでは最近分析した、顔面付土器の展開について紹介したい（中村 2022b）。

初期の顔面付土器は、前期末に出現した鍋の口縁部やや下に顔が付いた一群と、口縁部の

上に付された「獣面突起」と呼ばれる身体造形が変化し（平塚市原口遺跡に多数の例がある）、鍋の口縁部上に頭・顔、そこから鍋に抱き着くように 2 体ないし 1 対が対峙する一群がある。最近小田原市久野一本松遺跡で採集された突起は正面・背面の 2 つの顔を持つ事例があるが、外向きだった身体像が内向きになる過渡期に位置する可能性がある。伊勢原市田中万代遺跡例もその時期のもので、本来外向きの「獣面突起」の顔の鼻・口の部分が欠損（意図的破壊？）した結果、そちら側は後頭部文様のように見えている例である。先の 2 つの群は、やがて「土偶装飾付土器」となり、長野県藤内遺跡の「神像筒形土器」と呼ばれる優品へと引き継がれる。最近、伊勢原市神成松遺跡でこの段階の肩の破片が発見されている。

これ以降、この一群の身体は土器文様化して器体と融合していくのに対し、別の顔身体土器が複数系統出現する。1 つは、「土偶付土器」と呼ばれる、口縁部上に土偶全身（最初は尻まで、やがて脚まで）が表現される一群である。相模原市大日野原遺跡例が著名であるが、市内には他にも破片が存在する。もう 1 つが「顔面把手付土器」である。県内でも多くの例が知られており、昨年秋には座間市蟹ヶ沢遺跡で両面の事例が発掘されたが、ほとんどは鍋本体から離れた状態で出土しており、意図的な破壊と解釈されている。最後は釣手土器である。当初は顔を付けないが、勝坂式期の終り頃には、顔面把手の顔の部分をさらに打ち壊した形（秦野市鶴巻上の窪遺跡に好例がある）と同形となる。つまり、この時点の釣手土器は、象徴的に顔を打ち欠いた頭部像ということになる。その後、釣手土器の頂部に再び顔が付く段階（長野県御殿場遺跡例など）、その部分に渦巻などの単位文を付す段階（横浜市生麦八幡前例）を経て、その部分を表現しない形（川尻中村遺跡例）へと変化していく。

土偶装飾付土器・土偶付土器・顔面把手付土器は、比較的大人数で鍋を囲み食を共有するコミュニケーションが顔身体化によってより強化された状況と推定される。しかし、顔面把手はこれに加え、頭部をもぎ取り、顔面を破壊するという行為へとエスカレートしていく。土偶や石棒の破壊行為とも通じるが、現在の我々には強烈な印象を与える。実は、この時期の諏訪地域・北杜市域では住居数が減少している。前述の理由で即断できないが、社会不安に対する直接的・具体的な強烈な儀礼ないし呪術行為が求められた可能性を考えている

釣手土器の最盛期は、住居址数が最多となる加曾利 E2・曾利 II 式期である。前段階に起きた中期土器様式の「大転換」を経て安定した時期と考えられるので、より抽象的な釣手土器が、顔などの直接的な表現を失いながら継続していったものと考えられる。

5. 中期中葉～後期前葉の石棒の対置と再葬

中期中葉から後期前葉で目立っているのは大形石棒である（中村 2017）。特に、中期末～後期初頭には、国立市緑川東遺跡の重要文化財指定を受けた 4 本の例をはじめ、住居内から完形ないし焼けてバラバラになった例が多く知られている。その初源は、中期中葉の長野県穴場遺跡や町田市忠生遺跡 A 地区で、いずれも家屋に火を放っている。穴場遺跡では釣手土器、石皿、小形土器など複数の異質な二者の対置が複合している。その後も、石棒同士、土器と石棒、石棒と石皿、石棒と丸石、さらには土器と石器など異質なものが対置される状

況となっている。緑川例は2つずつ対になっており、それぞれ色が異なる。横浜市松風台遺跡でも緑泥片岩製（緑）と安山岩製（白）が配されている。忠生遺跡 D 地区や千葉県長田雉子ヶ原遺跡の事例で、土器と石器が四方向に対峙するように置かれており、さらに、そこに配される前に特徴的部分を打ち欠いている。こうした打ち欠きを伴う土器と石棒の対置は後期前葉の栃木県御城田遺跡にもみられる。土器の突起部分を欠くことによって男性器に対する女性器の象徴となるよう形態を調整しているのである。これらは、基本的には屋内で少人数が参画する抽象性の高い秘儀と考えられるが、家屋の意図的放火や埋め戻し、その後石を敷くなど多人数性の大規模な行為となるものもある。

中期後半以降の配石遺構の構築などもこうした動向に関連すると考えられ、広場を囲った環状列石や石敷きの家屋（敷石住居）などが盛行するが、中期末以降に出現する再葬は、おそらく屋外で遺骨を取り扱う点で、やはり強烈な印象を与える多人数性の儀礼行為である。千葉県で特に発達するが、横浜市小丸遺跡では焼人骨葬の例がある。

6. 後期中葉～晩期の注口土器・異形台付土器・屋外の大形石棒

後期前葉の儀礼用土器の大きな画期が注口土器の出現であり、特別な液体を注ぐ／注がれるという関係性を構築する。鈴木徳雄氏の言う「器種行為」である。南西関東では土器副葬に注口土器を用いる例が多く、長野県周辺の大形浅鉢で遺体を覆う葬法と、行為の点でも使用する土器の大きさ（コミュニケーションの範囲）の点でも対照的である。いずれの器種も、丁寧に磨かれ、通常の鍋の分布範囲を超えて広がっている。秋田かな子氏はこれを「地域間交流を媒介する性質」と呼んでいるが、儀礼用の飲食具としてぴったりの役割である。

ところが、後期中葉の半ば（加曾利 B2 式期）に大きな画期を迎える。神奈川県内、特に西部地域では遺跡数が激減し、注口土器は東北地方に由来するタイプへと変化する。同時に、東関東を中心に、異形台付土器・釣手土器・下部単孔壺などの特殊な器種が出現する。これらは中期の釣手土器同様、地域・時期を限って出現する儀礼用土器で、形態からは使い方を判断することは難しいが、前2者は香炉的な用途が想定されている。これらは屋内で出土することが多く、中期の釣手土器以来の抽象的な秘儀に関わるものと考えられる（中村 2021）。

一方、この時期以降、それまで墓域で出土することのなかった大形石棒が、墓域としての機能終了後に置かれるようになる（中村 2022a）。町田市田端環状積石遺構、秦野市太岳院遺跡などが著名で、近年、伊勢原市子易中川原遺跡などでも発見されている。この時点での儀礼行為の具体像は不明だが、やがて晩期前葉～中葉になると土偶・耳飾などもこうした場を集積され、中には埼玉県赤城遺跡や調布市下布田遺跡のように元墓域とは無関係に石棒・土偶などの集積遺構が構築される。古い土器の突起なども集積されるものの、その中心は身体造形である。

後期後葉以降は、貝輪・土製耳飾・小形石棒など身に付けるアイテムの種類や数が増加しているが、これらは墓坑から出土することは少なく、個人情報メディアとしての役割のほか、多人数の中でこれを用いることに意味があったと考えられる。

7. 身体象徴の強化と自然・社会環境

縄文時代の身体象徴を概観し、屋内での抽象的な秘儀と、屋外での具体的な儀礼の2つの流れを確認した。また廃屋儀礼を伴うものは、両者にまたがる。これらの動向をみると、中期中葉と後期中葉に画期を認めることができる。

従来、遺跡数や住居址数を根拠に、縄文文化の大きな画期と考えられてきた中期末～後期初頭の段階は、この観点からは大きな画期とは言えないということになる。

では、こうした身体象徴の画期の背景は何であろうか？ 筆者は、中期の顔身体土器を概観した際、諏訪地域と北杜市域の住居址数の増減を検討し、藤内式期に大きな落ち込みのあることから社会不安を想定した。何らかの社会環境の変化があったことは推定できるものの、現状では特定できていない。気候などの自然環境の変化に伴うものであれば、東北地方などでも同様の事態が発生しているかもしれない。藤内式併行期は大木7b式～8a式の変化の時期である。大木7b式期には福島県でもハート形の顔面突起や足形突起をもった鍋が一定数出土している。さらに北では、三内丸山遺跡や八戸市域で円筒上層d～e式に顔が付くものがあるが、これは中部や福島と比べるとやや新しい。

後期中葉、加曽利B2式期の変化は、大きな社会変化と対応している。それは、それまでの土器様式が関東から関西方面に共通性が認められていたのに対し、これ以降は東北との関係が増加するのである。注口土器の広域分布範囲がその変化を端的に示している。大規模な配石集落が開いた神奈川県西部で集落が終焉するのは富士山噴火の影響を指摘する声もある(富士山考古学研究会2020)。また、伊勢原市西富岡向畑遺跡で山が崩れて山林が一挙に埋没した時期も問題となる。こうしたローカルな、しかし地域住民には重大な自然災害を考慮する必要があるだろう。

主要参考文献

- 阿部昭典 2008 『縄文時代の社会変動論』アム・プロモーション
阿部芳郎編 2019 『縄文文化の繁栄と衰退』雄山閣
岡本 勇 1975 「原始社会の生産と呪術」『岩波講座日本歴史1』
工藤雄一郎 2012 『旧石器・縄文時代の環境文化史』
小林達雄 1977 『日本原始美術大系1 縄文土器』講談社
小林達雄 1997 「土偶の観念技術」『土偶研究の地平1』勉成社
谷口康浩 2005 『環状集落と縄文社会構造』学生社
谷口康浩 2021 『土偶と石棒』雄山閣
中塚 武 2022 『気候適応の日本史』吉川弘文館
富士山考古学研究会 2020 『富士山噴火の考古学』吉川弘文館
矢野健一 2016 『土器編年にみる西日本の縄文社会』同成社
溝口孝司 2022 『社会考古学講義』同成社
山本暉久 2002 『敷石住居址の研究』六一書房

事例分析の詳細

中村耕作 2013 『縄文土器の儀礼利用と象徴操作』アム・プロモーション

中村耕作 2009 「顔面把手と釣手土器－伊勢原市三之宮比々多神社所蔵の蛇体装飾付顔面把手を基点として－」『考古論叢神奈河』第17集 ※

中村耕作 2017 「縄文時代中期末葉から後期初頭柄鏡形住居床面の石棒・土器・屋内土坑」『史峰』45

中村耕作 2017 「緑川東遺跡 SV1 をめぐる論点」『国指定重要文化財緑川東遺跡出土石棒展』くにたち郷土文化館 ※

中村耕作 2021 「土器群の画期－新器種の出現、異形化、顔身体化－」『第54回考古学研究会東京例会「土器からみた縄文時代後期後半の地域間関係と社会－深鉢・注口土器・異形台付土器・香炉形土器－」発表要旨』 ※

中村耕作 2022a 「縄文時代晩期の大型石棒集積とその系譜」『縄文時代』第33号

中村耕作 2022b 「顔身体土器群の展開過程と身体部位表現」『モノ・構造・社会の考古学－今福利恵博士追悼論文集－』

※はリサーチマップの中村のページよりダウンロード可能